

# ウイグル古典文学と東西文化の関係について

——ウイグル族古典文学簡史（中）——

マイマイティミン・ユスブ  
买买提明・玉素甫  
高橋 庸一郎（訳）

## （Ⅱ）

『福楽智慧 (Kutadkubilik)』の研究は異なった国の研究者達によって続けられて来た。海外には三種の手書き写本があった。それ等は、ヴィエンナ (Vienna)<sup>67</sup>写本、カイロ (Cairo)<sup>68</sup>写本、それとフェルガナ (Fergana)<sup>69</sup>写本であり、すべてそれぞれが発見された場所にちなんで名付けられた。ヴィエンナ写本は古代ウイグル語で書かれたが、カイロとフェルガナの写本はアラビア語で書かれたものである。

これ等の写本の発見と、その歴史的、学術的内容は直ちに国際的な学会の興味を惹きおこした。フランスアカデミーの中近東言語学者ジョベル (Jobel)<sup>70</sup>は最初に、ヴィエンナ写本を世界に1823年という早い年代にアジア雑誌への投稿という形で紹介した。同時に彼はまたその作品の中からいくつかの節を抜粋して出版したのである。それは今日まで持続されて来た『福楽智慧』についての世界の学者達の興味の始まりであったと思われる。その過程で『福楽智慧』についての目覚めが、ハンガリー、デンマーク、ドイツ、トルコ、イタリー、日本、それとソ連邦の学者達によってもたらされ、そして彼等の研究によって完成された業績は学問的に極めて高く評価されたのである。こうした研究の業績に寄与した研究者は、ドイツのオットー・オルブライト (Otto Olbrit)<sup>71</sup>、ハンガリーのワミブリ (Wamibri)<sup>72</sup>、トルコのエヌ・ジップ・アシム (N Jip Asim)<sup>73</sup>、リシット・ラフミティ・アラト (R xit Rahmiti Arat)<sup>74</sup>、ソドリ・ナハスド・アドリ・アガル (Sodri Nəhsud Adil

Agar)<sup>75</sup>、それにトルコのコプロリ・フォアルザド (Koproli Foarзад)<sup>76</sup>、イタリアのボンバミ (Bombami)<sup>77</sup>、帝政ロシアのマロフ (Malov)<sup>78</sup>、ラドロフ (Radlov)<sup>79</sup>、タルトリド (Tartolid)<sup>80</sup>とサムロウイング (Samlowing)<sup>81</sup>、ソ連のアマト・ザキ・ワリディ (əhmət Zəki Wəliidi)<sup>82</sup>、イミール・ナジブ (Imir Nəjip)<sup>83</sup>、キユム・カリムウ (Kiyum Kərimuw)<sup>84</sup>、デンマークのトムスン (Tomsin)<sup>85</sup>、ドイツのビロクリマン (Birokliman)<sup>86</sup>とハルトマン (Hartman)<sup>87</sup>などの名を挙げることが出来る。

1870年、ハンガリーの研究者、ワミブリ (Wamibri)<sup>88</sup>はラテン語に翻訳されたものからドイツ語に改訳されたヴィエンナ写本の一部を出版した。1890年から1910年にかけての20年間に、ロシアの研究者ラドロフはヴィエンナ写本とカイロ写本のスラブ語訳とドイツ語訳を出版した。1928年、フェルガナ写本の主要な内容は、それより三年早く写本を発見したウズベキスタンの学者ピティル (Pitir)<sup>89</sup>によって出版された。その脚注つきの内容はウズベックで1971年に出版されたのである。キユム・カリムウによるウズベク語訳はソ連邦のタシケントで出版された。1983年ロシアのイワノフによるロシア語訳はソ連邦のモスクワ科学印刷出版社から出版された。『福楽智慧』の部分的な翻訳と改訂は、ワルティトワ (Walitowa)<sup>90</sup>、アブドラマチフ (Abdurahmanav)<sup>91</sup>やゴレブネフ (Golepnev)<sup>92</sup>等によってもソ連から出版された。今日までに、ソ連で出版された最も完全なロシア語の訳本はイワノフによるものである。ソビエトアカデミーはひき続いて1980年から1983年

の間にアゼルバイジャンとカザフでその抜粋を出版した。

1942年と次の年に、トルコの出版協会は、その三種の手書き写本の写真版による複製本を出版した。そして1947年には、学会に今なお最も好まれている、リシット・ラミティ (Rixit Rahmiti Arat)<sup>93)</sup>によるラテン語の改訂版が出版された。このトルコ人の研究者は『福楽智慧』の研究に生涯をかけ、それぞれの異なった写本を比較対照するという長年の研究の後、ラテン語の音声表記による手書き写本の翻訳本を完成させたのである。それは世界中の研究者達の為に、その土台をつき固めたものであった。1983年にはロバート・ダンクロフ (Robert Dankrov)<sup>94)</sup>による英訳が、アメリカのシカゴで出版された。

ロシアの研究者ラドロフによる『福楽智慧』の出版の為の序文 — 「古代ウイグル族の作品について」には、『福楽智慧』はイスラムへの改宗後のカラハン王朝の文化と思想の歴史を研究する上で重要な意義を有するものである」と述べている。1983年のコロノフ (Koronov)<sup>95)</sup>のレポートには、『福楽智慧』は最も古いトルコ語で書かれたアンソロジーであり、それは人間の本質を具体的に表わした百科全書であるとも書かれている。最初に『福楽智慧』をロシア語に訳したイワノフは、「それは中世紀の多くの文学的作品の中でも、賞賛されるに十分値する一つの極めて偉大な韻文作品である」と述べている。バルトリッド (Bartolid)<sup>96)</sup>は彼の『中央アジア、トルコ史についての十二講』の中で次のように書いている。「カシュガル時代に始まるトルコ系文学とトルコ系文化は漢族中国文化の影響に密接に関係づけられている」と。特筆すべき価値ある点は、『福楽智慧』が当時のウイグル語版として中国で出版されたものには、4年間をその完成にまで導いた有名なウイグルの詩人でありまた研究者でもあるキルギスタンとカザフスタンのナリンバイエフ博士 (Dr.Narinbayev)<sup>97)</sup>とハシムフ博士 (Dr.Hasimuv)<sup>98)</sup>の注がついており、また彼等の我々の仕事に対

する慶賀の言葉が附帯されていたという点であり、またカザフスタンの新聞『共産主義の旗』に、「我が先祖からの遺産 — 『福楽智慧』新版」というタイトルで記事が掲載され、それには、「それはウイグル史上カラハン王朝の全盛期に世に出たものであり、そこにはウイグルの歴史や言語を後世の人々が理解する為の長期に亘って秘蔵されてきた遺産が詳細に記録されている」と述べられている。彼等はまた、この著作は、社会について、また中央アジアや新疆の人々の哲学や倫理についてのその疑う余地のない影響をもたらしたのだとも述べている。

それでは『福楽智慧』とは一体どういった種類の著作なのであろうか？それぞれ異なった国々の研究者のそれぞれ異なった見方がある。この著作の研究で評判を得たトルコの学者リシット・ラフミティ・アラト (Rixit Rahmiti Arat) は、彼の最初の翻訳本の序文で、「それはただ歴史的な事件を生々しく描くというだけの文芸ではなく、あるいは国々や諸都市について描写したような地理学的作品でもなく、またただの官僚達の振舞いをえがき出そうとしたある特別な文集でもなく、またある特定の哲学的な概要を具体的に解説しただけの作品でもなく、また有名な作品を通じて人々を教育しようとする試みでさえない。というのもユスブ・ハジ・ハジブは影響力ある人々に対して頭を下げるような人物ではないし、また生気のない意味のない対比によって人を教えようとする人物でもないからである。彼の著作は人生の意味を知る指針であり、一人の哲学者であり研究者としての彼の目標は人々に彼等の社会と国家に対する責任を教えることであるということがそのタイトルからも理解出来よう。」と述べている。もう一人のトルコの研究者マハスト (Məhsut)<sup>99)</sup>は、「『福楽智慧』は倫理学・思想・法律の簡潔な表現であり、トルコ語を話す人々のカナメであり」、またそれは、「政府機構、政治上の法律、社会道徳の問題に対する調査でもある」と考えている。ドイツの研究者オットー・オルブライト (Otto Olbrit) は、哲学的著作として『福楽智

慧』はアラブの哲学者イブン・シン(Ibn Sin)<sup>100</sup>とアリストテレスの思想による影響を受けたものである」と考えている。トルコの研究者コプロリ(Koprolu)<sup>101</sup>はその見方に同意している。彼は、『福楽智慧』に含まれている思想はイブン・シン(Ibn Sin)からの影響が最もはっきりとしている」と述べている。しかしロシアの研究者ラドロフ(Radlov)、バルトリド(Bartold)<sup>102</sup>、それにツクセワ(Tukuxewa)<sup>103</sup>は『福楽智慧』を、最も高い価値の文学的集成であると考えている。我々自身の研究者、リ・チー(Li Qi)<sup>104</sup>は、東洋・西洋の研究者達が導き出した研究結果の基礎の上に立って、この主題を調査しつづけている。

中世のウイグルの詩はその時代の進歩的美学的理想主義を具体化したものであり、また『福楽智慧』の成熟した文学的形態の影響は、中央アジアとボルガ川流域のすべての隅々にまで広がっている。このため、ソ連邦のエー・ハロソフ(A. Harosov)<sup>105</sup>は正確に、「中央アジアからボルガ川とウラル川流域にかけての文学的著作に関しては、ユスブ・ハシ・ハジブの『福楽智慧』がトルコ系文学の中で歴史的価値のある最も早い著作であり、またその実質的な内容はすべて包含しており『福楽智慧』の意義深い詩句は、地球上のこの大地で意味ある人生を送りたいという願望と、それと中世という時代に於ける彼等の目覚めた内面的世界の中の、人々の理想と苦闘を反映しているという所にある。」と指摘している。『福楽智慧』の最も早い研究はロシアの学者ラドロフによってなされた。彼の『古代ウイグルについての事ども』の中で、彼は最初にユスブ・ハシ・ハジブの詩に使われている言語はウイグル語であると述べている。後にマロフは、『福楽智慧』の三種類の手書き写本について』の中で比較研究を行い、アラブ語で書かれたカイロ手書き写本はフェルガナ手書き写本と近い写本であること、そして古代ウイグル語で書かれたヴィエンナ手書き写本は、カイロ、フェルガナ写本とは大きく異なっており、そして古代ウイグル語で書かれた手書き写本だ

けが文学作品の断片としての価値あるものであるとなえたのである。ラドロフは彼の『中央アジア文学史に於けるアルシ(ārxi)とナワイ(Nawayi)<sup>106</sup>』また『古代トルコ文書』の中で、『福楽智慧』に使われている言語は「古代ウイグル語か、ウイグル語」であると指摘している。バシコフ(Bashikov)<sup>107</sup>とティニシフ(Tinisiv)<sup>108</sup>は、それが古代ウイグル語であり「それはカラハン王朝時代に用いられたものである」ということを確認したのである。

他の研究者達ははっきりとは『福楽智慧』が古代ウイグル語で書かれているとは指摘していないが、しかしそれはウイグル語とカラハン王朝の言語で書かれているのである。トルコの研究者、アラト(Arat)はその言語がウイグル語であるということを確認している。『福楽智慧』第一章の彼の翻訳の序文でいく人かの研究者はその言語がアラブ語であると考えてることを期待して次のように指摘している。「カラハン王朝が国家宗教としてイスラム教を採用した時、アラブ語と古代ウイグル語は同時に使われており、カン・ハサン・ブクラハン(Khan Hāsān Bukrahan)<sup>109</sup>の時代の間でさえ、イルカン(Yirkan)<sup>110</sup>国の筆記上の意志疎通は両方の言語で行われ、古代ウイグル語のサインが見られる。同時に中央アジアでは、アルトゥン・オルダ汗国(Altun Orda Khanate)<sup>111</sup>やイランでは17世紀まで古代ウイグル語が使用されていた。」この点から言えば我々は『福楽智慧』の写本がハサン・ブクラハン(Hāsān Bukrahan)<sup>112</sup>に提示されたのは古代ウイグル語であったと信じることが出来る。ソビエトの研究者、ワリトワ(Walitowa)<sup>113</sup>は彼の『カラハン王朝の階級問題』の中で、『福楽智慧』で用いられた言語はカラハン王朝の言語であると指摘している。イワノフ教授は『福楽智慧』のロシア語訳の巻末の覚え書きの中で、「トルコ東部の方言には古代ウイグル文学の歴史的口頭物語言語がふくまれている」と指摘している。ソビエトの研究者ヒルベック(Hilbek)<sup>114</sup>は、1961年に公表した『トルコ文書の文法に関する覚え書き』の中で

『福楽智慧』は「グルロウイグル語 (Gurulo Uighur)<sup>115)</sup>で書かれたと述べている。

ウイグルの詩人アハマット・ジヤイ (ǝhmǝt Ziyai)<sup>116)</sup>は、彼の『福楽智慧』の整理編集の過程で、その時代のウイグル語で書かれた数百の単語と章句を発見した。我々自身の研究者達も、『福楽智慧』の中から、解説なしで現代のウイグル人が理解することの出来る数千行をピックアップしている。以下はその箇所の一部である。

\* \* \* \* \*

我はこの書を『福楽智慧』と名づけた  
読む者を至福の境地に導かんことを、

\* \* \* \* \*

「神主」と「知識」の言葉の違いは  
ただ筆の働きのみならむ

\* \* \* \* \*

汝の舌の根に気をつけるがよい  
なれば汝の歯を傷つけることなからむ

\* \* \* \* \*

汝の言葉に気をつけるがよい  
さもなくば汝の人生を危かしめよう

\* \* \* \* \*

一つ一つの言葉は熟慮の後語らしめよ  
汝の口に出す言葉を瞎しいたる者にも悟らしめる如くせよ

\* \* \* \* \*

王の御姿はお召しそのものなのだ  
彼のお方の客人としてその側かたわらに身を置くがよい

\* \* \* \* \*

大地という敷物の上にはあるが、生は遂には死のみなり  
なれど死は善行によりて不朽なるを得む

\* \* \* \* \*

彼のお方の雄雄しい益荒男ぶりは目にもまばゆい

彼のお方の優しいお言葉は人の心を揺り動かす

\* \* \* \* \*

我は我が口に出だせし言葉を恥じ、  
許されるべき我が後悔を受け入れる

\* \* \* \* \*

賢明なる人は彼のお方のお側に召し出され、

知識すぐれたる人は彼のお方の尊かまれる客とならむ

\* \* \* \* \*

トビラを大きく開けて、逢瀬を楽しましめむ

抱擁と口づけ、再会は甘美なり

\* \* \* \* \*

我が心は弓の如く、我が肉体は矢の如く、  
されど今我が心は矢の如し、なぜなら我が  
肉体は弓の如く曲れり

\* \* \* \* \*

心が火に焼かれ死に到る時  
すべての希望は灰盡に帰す  
「若さ」は我に別れを告げる

\* \* \* \* \*

「若さ」は我に何を与えてくれよう  
「老醜」が一人、一人と襲いかかるのだ

\* \* \* \* \*

彼のお方は決して終ることのない我が夜を  
輝やかしめ

彼のお方は我が暗黒と絶望を照すべく太陽  
におおじになる

\* \* \* \* \*

あゝ、我が子よ、我は汝に多くを語った  
我が言葉を汝の胸に深く刻みつけよ

\* \* \* \* \*

金と銀は最後まで残ることはない  
しかし我が訓戒には従うがよい  
さすれば汝は宝玉を手に入れむ

\* \* \* \* \*

速く、死がまだ汝に追いつがる前に  
深き所に身を隠せ、汝の身がまだ露になる  
前に

\* \* \* \* \*

誰が死の毒牙からのがれられようぞ、  
誰が最後の審判からのがれられようぞ

\* \* \* \* \*  
 黄金の御殿もいつか見すてられる日が来よう  
 そして号泣が地の底から漏れ聞えて来るのだ

\* \* \* \* \*  
 彼のお方はのたもうた、「子供こそ予がこの世に別れ告げることの証しなり、決して忘れることなかれ」と

\* \* \* \* \*  
 予は言わねばならぬことは言いおえた  
 我が言葉を忘るるなかれ、そして我がこと善きを祈れ

\* \* \* \* \*  
 『福楽智慧』という名称について著者は次のように述べている。

我はこの書を『福楽智慧』と名づけた  
 読む者を至福の境地に導かんことを『福楽智慧 (Kutadkubilik)』の「Kut」は与えるの意であり、「Bilik」は智慧を意味している。故にその全体の意味は「Happiness that Wisdom Bestows (智慧が授ける幸福)」である。ロシアとソヴィエトの研究者ラドルフやその他の人々は「Kutodkubilik」を「Happy Wisdom (幸福なる智慧)」「Wisdom for the Happy (幸福への智慧)」、「Wisdom that brings Happiness (幸福をもたらす智慧)」、「The Wisdom that Brings Happiness (幸福を運ぶ智慧)」や「The Wise Are Happy (賢明なる事は幸福なり)」、「Wisdom to the Happy (幸福への智慧)」などと翻訳している。ハンガリーの研究者ワミブリ (Wamibri) やトルコの研究者コプロリ (Koprolı) はそのタイトルを「Wisdom of Happiness (幸福の智慧)」と理解した。他のトルコの学者サドリ・マハスト<sup>117)</sup>は、「Kutodkubilik」を「A Handbook of Law (法の手引き)」と訳している。我々自身の『福楽智慧』についての研究者や学者達、即ちアハマト・ジヤイ (ǝHmät Ziyai)<sup>118)</sup>、アブドリヒム・オツクル (Abdurihim ǝtkür)<sup>119)</sup>、サルヒディン (Xǝrfidin)<sup>120)</sup>、ツァイ・ツァンチン (Cai Can-

jing)<sup>121)</sup>、ワハプ (Wahap)<sup>122)</sup>、アブデウスフル・ムハメド・イミン (Abdushukur Muhammed Imin)<sup>123)</sup>、トゥルグン・アルマス (Turgun Almas)<sup>124)</sup>、マハマト・ズヌン (Mǝhǝmmät Zunun)<sup>125)</sup>、そしてドゥシャオユアン (Du Shao-yuan)<sup>126)</sup> はユスブ・ハジ・ハジブの生涯、仕事、時代、思想、幼年時代また学校と教育などに関する問題などすべてについて探求したのである。

彼の出生について、彼の著作の序文からは我々は一つの手がかりさえ見出す事は出来ないが、その詩の次の詩句を分析してみれば、著作の完成は1069年と1070A.D.の間であるということは断定することが出来る。即ち

イスラム暦の462年に、  
 予は我が書を完成させ、我が筆を休めり

また  
 八ヶ月から十ヶ月はこの書をかくのに費やした

めくるめく言葉とフレーズの大海から、  
 その最も美しき選択に到るまで。

我々は上記の詩句から、この作品に費やされた時間を知る事が出来る。

またそこには次のような表現も見える。

五十路にして我が頭にふれなば、  
 我が髪は、うるしの如きつやかなる黒より、  
 雪の如き真白に変わりぬ

我々はこの著作者はイスラム暦412年 (1019A.D.) に生れたのであるということを結論づけることが出来る。彼の没年についての手掛りは全く無いが、『福楽智慧』の補篇の部分から我々は、著者が晩年、五十歳という年齢で呪うべき老いが余りにも速く到来した事を嘆き悲しんでいたという事を知る事が出来る。その意味で補篇は人の世の無常さ、若き日々のはかなさに対する悲しみで満ちみちている。

例えば

嗚呼、若さよ、青春よ、予は汝をいとおしまむ

予は汝の別離を待ちうける事は出来ぬ  
 さりとて予は汝をこの手に握り置く事は出

来ぬ

されど予はそが如何に難しかろうとも汝を  
この掌に握りしめておくことを試みむ

\* \* \* \* \*

嗚呼、若さよ、もしも汝が再び我が身を訪  
れることが出来るなら

予は汝を金欄にしきの如くこの手の内にし  
つと握りしめ手放すことはせぬ

\* \* \* \* \*

我がつややかな黒髪は、真白き霜に被われ  
かつて満月の如く輝映えたこの顔は、今や  
蜘蛛の巣の如き皺が飾り立てり

\* \* \* \* \*

かつて予は春爛漫の花の時を謳歌せり  
今や萎れし葉、秋の雪が我が身に降りかか  
れり

\* \* \* \* \*

かつては天を突くポプラのように真直すぐ  
伸びたこの肉体はまるで一本の矢、  
今、予は背を丸め、腰はかがまり、一握の  
弓とみまごうばかり

\* \* \* \* \*

我々はユスブ・ハジ・ハジブは70歳か80歳ま  
で生きてに違いないと結論づけている。『福楽  
智慧』から、この作品が書かれ完成した場所を  
知る手掛かりを与えてくれる詩句を見出すこと  
が出来る。即ち「……カシガルにて成りおわり  
ぬ」とあるのがそれである。歴史的に遡って  
我々は、この著者がその全生涯をカシガルで送  
ったということを確認することが出来る。

上記の点とは別に、我々はまた『福楽智慧』  
は、それがウイグル文学とウイグル語の一つの

そしてゆるぎない模範となっているという証拠  
を多数提供するものであるという事を断言する  
ことが出来る。それは、言語文学の分野を含め  
て、編集学の点からも研究と分析を通じて更に  
一層鞏固に証拠だてる事が出来る。我が中国の  
研究者達、即ちシン・フェンシ(Xing Fen-shi)<sup>127)</sup>、  
リュウ・クイリ(Liu Kui-li)<sup>128)</sup>、ワン・ピンファ  
ン(Wang Ping-fan)<sup>129)</sup>、それとラン・イン  
(Lang Ying,朗櫻)<sup>130)</sup>やその他の研究者達はその  
主題について深く研究を行い、この著作を研究  
するという唯一の目的を果す為のある一つの研  
究学会を組織した。

我々は新しい時代という夜明けを伴いつつ、  
『福楽智慧』に関する研究が更に発展するであ  
らうということを信じているし、また不明確な  
点が解明され、それによって、我々の輝かしい  
過去の歴史と先祖達が我々に伝え残してくれた  
不朽の遺産を研究することが、極めて壮大な価  
値を持つものであるという新しい見方をもたら  
す事になるであろうと信じてやまないのであ  
る。

かつてシルクロードが貫いていたこの黄金の  
大地が開発され、中央アジアと東洋・西洋の  
人々の間の文化的交流が増進されれば、相互に  
影響し合い且つ創造性に富むという伝統は更に  
一層増幅され、そうすれば我々は人類を進歩に  
導く所の文学的貯蔵庫に対して、そしてまたす  
べての人々にとっての平和と幸福を支え発展さ  
せることに対して更なる貢献が出来るものと信  
じて疑わないのである。

(1997年12月19日受理)